

南方（その他）

降伏せず自決せず

玉碎地テニアンを生き抜く（一）

京都府 小川 米 治

「小川さんは何年徴集ですか、陸軍だったといわれたが、何時テニアンに行かれて、よく玉碎せず帰られましたね。」

私は昭和七年兵ですから大正元年生れ、満州事変、支那事変と大東亜戦争にも従軍したわけで、元陸軍上等兵で勲八等なのです。

昭和十八年十月、海軍施設部に徴用された部隊名は「ウ二三三部隊」でウとは内南洋の略記号、海軍第二

三三設営隊です。設営隊というのは、占領地に進出目的地に飛行場を急速に造成したり、敵航空基地を緊急に補修するものです。部隊長は現役の海軍少佐、副隊長は海軍軍医中尉だったが、無防備の設営部隊です。そのため海軍の小銃隊三十名が約三百五十名の防備にあたるのです。

飛行場建設部隊の半数は在日朝鮮人で、主力は土木。その他は京都北部、石川、福井県から徴用された十八歳から四十歳までの者です。私のような元上等兵が十二、三名いて、これは隊員に軍事訓練をする教育員です。部隊は三個中隊編成で、中隊長は海軍技官、小隊長は軍属技手、私は中隊付記録員の役名で、現地作業の経過を記録、日記式で数字を記載する。作業人員の配分のほか、人事一般、内務事務に従事していまし

たが、私の指導する隊員は京都府北部から徴用された三十数名でした。

昭和十九年三月一日、本隊は編成地舞鶴から貨物輸送船に乗船して出発、関門海峡、瀬戸内海、大阪湾を出て横須賀に入港、陸軍部隊、海軍部隊、工作隊などの九隻で船団を編成したのだが、全国各港から集まったものです。私の船は土木部隊だから船底には火薬が何百トン、土工具、食糧を積み、船倉は中段・上段に隊員が雑居し鯨詰めでした。

―昭和十九年というと、もう制海権も制空権も敵の手中にあつたわけで、途中事故はありませんでしたか。

船団を組んで巡洋艦一隻・駆逐艦二隻に護衛され横須賀軍港を出港した。しかし、出港の時は行先も教えられなかったが、出発四日目に太平洋上でテニアン島へ行くと公表された。九隻の先頭には巡洋艦一隻、左右に駆逐艦が一隻ずつ先になり後になり、敵潜水艦を警戒しながらジグザグ、船団速度は六ノットぐらいだったが、五日目に一大事が起きた。

予期した通り敵潜から発射された魚雷で、輸送船が航行不能になり、護衛の巡洋艦も損害を受けて日本へ引返し、後の七隻は駆逐艦二隻に見護られて航行を続けたのだが心細い限りでした。

二十二、三日頃になると一隻、二隻と船団から離れて方向を変えて行く、甲板から陸軍の兵員が手を振って無事を祈る様にさよならしていた。私共もこれに応えたが、しかし私共の船に魚雷が命中すれば何百トンのカーリット火薬が大爆発、前後四、五百メートル間隔の船も沈没してしまつたろうと。船の中で隊員に「お前たちテニアンで飛行場を作るのだ」とは言ったが、当時テニアンのは良く判らない。

―テニアン島の様子を一寸話をしてくれませんか。テニアンは小笠原諸島の南のマリアナ諸島にある南北二十キロ、東西九キロで薩摩芋形の平たい台地の島で、グアム島は南北四五キロ、東西の広い所が二十キロ、サイパン島はグアムよりやや小さい。グアムはアメリカ領土だが、他は日本の旧委任統治地で、南洋興発という大きな会社が砂糖を生産していた。朝鮮人二、

七〇〇人を含む邦人一五、七〇〇人が働いていたが、農業従事者は沖繩県人が多かったようだった。そのうち二、〇〇〇人以上の人は、昭和二十年に内地へ引き揚げたが、海上航行は大変危険になったので帰国をあきらめた人が大部分だったといえます。

サイパン島は常夏の島で空は青く海は緑色に澄みきった極楽島です。テニアンは砂糖黎畑が人の高さの二倍もある。テニアン町の海岸以外は大部分が数十メートルの崖だった。

二十五日目に最初着いたのはサイパン湾だった。島民の小舟や守備隊の蒸気船がわんさと船の周囲で手を振って歓迎してくれたが、物資や兵員を積んだ船でなく、土方部隊だから恐らくがっかりした事と思う。

しかし、私は港へ入ってびっくりした。大きな輸送船が五・六隻焼けただれ、ブリッジもマストも穴だらけの巨体をさらしている。どこかの部隊を輸送する途中空襲でやられたのか、輸送を終えて日本へ引き返す途中やられたのか判らない。母船は物資を荷降ろしするため早朝テニアンへ行き、夕方早く引き揚げてサイ

パン湾に避難する。こんなことを約一週間繰り返しているのは、夜は潜水艦を警戒して作業が出来ないのだ。私共はその間サイパン港に上陸して待機していたが、当時日本は七分通り敗けているのか、サイパンは敗者や沈没船の救助者のたまり場になっていたようだった。

陸軍だか海軍だか見分けのつけられない無籍者同然の、将校とも兵士ともわからない有り合わせの服を着ている。海軍の兵隊で陸軍の帽子を被っている者もいるし、私達の臨時の炊事場へバケツや空き缶を持って残飯を貰い、というより乞いに来る。「済ません、済ません」と頭を下げている。これが昭和十九年四月の実情だった。日本内地では大勝、大勝と宣伝されていたのだが。私達の船は荷降ろしを終って、あわてて日本へ引き返していったのは次の輸送日程に遅れては大変だったからだろう。

―部隊が上陸した当時、日本軍の守備状況はどうだったのですか、マッシュタル、トラックもやられ、マリアナ空襲も段々激しくなってきたでしょう

か。

私達には全般の状況や上層部のことは判らなかつたが、周囲の状況で、今言つたような感じを持つていたのです。帰つてから、マリアナ玉砕の書籍が出たり、慰霊に行つて当時の状況が判つて来たわけです。

それによると、昭和十九年の初期、私達が上陸する少し前までの陸上防衛というか、戦備はサイパンと同様にゼロに等しかつたといひます。この頃までマリアナ諸島は中部太平洋方面の基地航空部隊の中継基地であつて、本土防衛の第一線基地になつていなかつたといふことです。一月中旬ごろ、遅まきながら第四十三師団（誉）の先遣隊が派遣されたといふことです。

海軍は昭和十九年に入つて第一航空艦隊の戦隊が、グアム、サイパン、テナンの各基地に配備され、テナン島には二月二十一日、第一航艦司令部が設置されたのだと聞きました。しかし、二月下旬には米軍の機動部隊によつてマリアナ諸島の基地は大空襲を受け、テナン島基地の航空機の大部分がやられてしまつた。ですからテナンはほとんど無力になつていた

のです。

三月上旬、満州の第二十九師団（雷）の歩兵第五十連隊の（緒方数志連隊長）約三、〇〇〇名近くがテナンに到着した。本来は第四十三師団（誉）がサイパン防衛任務であつたのですが、歩兵第一三五連隊の次の第二陣が米の潜水艦雷撃を受けて遭難したし、マリアナの大空襲があつたので、当初の予定を変更し、ロタ島防衛用の第五十連隊がそのままテナンの守備についたのです。

そんな時に我々の部隊がテナンへ上陸したわけだから、正直言つて、先程申したようにどの兵隊が何隊なのか、どのくらいの軍隊が防備していたか全く判らない。海軍もいた、陸軍もいた、一部は、一時的滞在者（沈没船からの救助者、船待ちの人たち）もいたわけでしょう。

ですから、最近テナン、サイパン慰霊で同行された方々の出身部隊を見ますと、

第一航空艦隊、第三四三航空隊

（昭和十九年三月十九日鹿兒島編）

第五十六警備隊（昭和十九年三月一日第六十九警備

隊改編）

第二二二航空隊（昭和十九年三月二十九日）

第八十二防空隊（昭和十九年二月十四日）

第八十三防空隊（昭和十九年二月十四日編成、七月

十八日、第四十一警備隊トラック

島に編入）

その他に「タカ」「龍」などの通称で呼ばれた航空関係部等が、テナンの海軍部隊であったと知ったわけです。

後資料で判ったのですが第五十六警備隊司令は大家吾一大佐で隊員九五〇人を中心に海軍は四、一〇〇人。陸軍は五月末までに、歩兵第一三五連隊第一大隊、戦車中隊、自動車部隊などで陸軍兵力は四、〇〇〇人になっていた。航空隊はマリアナ空襲でほとんど破壊されたが、やっと以前の数に回復したといえます。

「いよいよ設営隊の作業が始まるわけですが、どのような状況でしたか。

私たちのテナンでの任務は、島の南部に飛行場を

建設することだった。マリアナの状況は緊迫していたので、飛行場を早く建設しなければならない。土工道具は、シャベル、つるはし等で機械などはない。食糧は少なく、握りこぶし大のにぎり飯にたくわん。昼夜二交替で、大きなローソクの火の灯で土方作業。隊の命令で食い延し策、島民の畑の薩摩芋を徴発して、各班毎に二人の補食係を当て、半日に一人一個の芋を配給した。周囲には乞食同然の兵隊、戦わずして死んでいった兵隊も随分いたろう。

私共は、遠からず我々の身上に来るだろうなど誰も予測していた。隊の幹部もそれを知っていた。隊員の前では立派な訓示はするが反面、生きている内の余禄だと思つてか、隊員に配給すべき物を食ったり、飲んで言語道断な振舞、隊員の一人が爆発して殺されそうになった幹部もあった。玉碎直前のことです。

米のマリアナ空襲開始二ヵ月位前のことだが、三時間位しか睡眠をとらないのと炎暑のため栄養失調者が出る、頭が変になる者、これを人は「南方ボケ」と名付ける。幼稚園級の童謡を歌ったり、ニヤニヤ、ホヤ

ホヤしてまともに口をきかないボンヤリ型、何処へ行つたか行方不明者も出る。致し方なく、要注意人物は木陰の木に犬なみにつないで置いたりした。玉砕直前の我が隊もこんな状態だった。

テナアンは我々が上陸する前はかなり空襲を受けていて、南洋興発の鉄骨の砂糖工場が焼け、小山のような砂糖の三盆白の露天の山が二つ三つあったが、着任してから偵察空襲は時々あつて作業は中止して防風林に避難した。

我々は兵器を持たない部隊で、心細い限りだが、防衛隊も遅時きだが準備をし、守備隊長は歩兵第一三五連隊の緒方大佐がなつて海軍も指揮下に入れた。水際防御をするためテナアン町の西海岸から敵は上陸するだろうと主要陣地を築いて、主力をそこに配備した。

いよいよ七月初めアメリカ軍の本格的な大攻撃が開始され、サイパン島は三週間で玉砕した。その間、テナアンからは見ているだけ（一部が救援に行ったが不可能だった）、米艦艇が真黒に集まっている。砲爆撃で島も見えなくなる。どんどん上陸舟艇が上陸している。

今度はテナアンかと随分不安になったり、覚悟もしなければならなかった。

我が方の航空機は数倍の敵機に勇敢に交戦したが、二、三十分の空中戦で全滅した。高射砲陣地が火を吹いたのは一時だけで、何千発の砲爆撃で手も足も出ない。八月十日頃にはテナアンの戦力はほとんど無くなつていった。

我が部隊は甘蔗畑やジャングルに展開していたが、畑は焼き払われ、飛行場は完成と共に爆撃をされ、友軍機は一度も使用せず、穴だらけ、設営隊員が犠牲を払った苦勞が水泡に帰し誠に残念だった。敵が上陸する前に指揮系統はバラバラになった。敵は、テナアン町前面に上陸するように陽動し、これを日本軍は砲撃によつて撃退したと喜んだ。しかし、米軍は手薄な北西海岸から上陸し、南下した。日本軍の兵力も火力も米軍よりはるかに弱かったので段々と南へ圧迫された。

我々は兵器が無いから、バラバラになつたので五尺ぐらいの木の先に急造の三分鉄棒一尺位を取付け突撃

に備えた。自決用にサイダーの空き瓶、缶詰の空き缶に火薬をつめて火繩一尺と雷管一個、マッチは二人に一個が支給された。これが最前線で戦う日本軍兵士の兵器。総てをあきらめている者にはおかしくも無く腹も立たない。

我々が見たり感じたりしたことは、アメリカのテナン攻撃で先ず相手の戦術にはめられた。アメリカの戦艦が水平線の向こうから砲撃を続ける。何処から砲弾が来るのか判らない。サイパン海岸からも砲撃してくる。頭を上げられない程爆撃する。だから敵が上陸したり、陸上から攻めて来る前に、防備軍は大部分戦死した。我々の部隊もバラバラになり、誰が生きていて、誰が死んで、誰が何処にいるのか判らなくなって、部隊とか隊でなく、生きている者が個人々々集まって行動するということとなってしまった。

―テナンは玉砕した。しかし沢山の兵隊はどのようにして最後の戦いをしたか、各隊長や、隊員とはどのように連絡していたのですか。テナン守

備隊や一般邦人の玉砕状況を話して下さい。

テナンは我々軍隊だけでなく、南洋興発などの一般邦人が一万何千人いた。その人たちも戦争に巻き込まれている。これを守る日本軍は、爆薬を背にししたり、手榴弾を手にして決死隊となって戦車に突っ込むのだが、その前に戦車砲や機関銃で次々に殺された。

玉砕の状況は資料で先に話をする必要があると思うので荒筋を申します、緒方隊長は二十五日総攻撃を決したが、大本営から「持久戦を続け米軍に出血を強いよ」との命令で総攻撃を断念した。三十日、敵は第三飛行場になだれ込んでテナン町に進出した。日本軍は蝟つばを掘って防御線を敷き斬り込みをしたが砲弾で次々と吹き飛ばされた。戦闘の最後はマルボ盆地からカロリナス台地に至るジャングル地帯の攻防戦で、一般邦人も義勇隊を編成し弾薬運びや伝令として協力した。集団自決した老人や婦女子も多く、また米軍の集中砲撃で多くの死傷者を出し日本軍は敗退した。夕方には命の綱のテナン島唯一の湧水、マルボの井戸も米軍に占領された。

カロナス台地の残存部隊は八月一日未明夜襲を決

行、白兵戦の後撃退された。米軍は戦車を先頭に進撃し、付近一帯の洞窟陣地をしらみつぶしに、火焰放射器と自動小銃で掃射した。日本軍は南東部ジャングルに後退し、海軍部隊の第五十六警備司令大家大佐、航空隊の栗野原大佐、我が第二百三十三設営隊長の林少佐等は戦死した。米軍のシュミット少将は「八月一日午後六時五十五分、テナアン島占領」を宣言した。

緒方守備隊長の手元には日本軍三〇〇人がいたが、連絡系統は分断され孤立した残存兵に連絡のとりようもなく（私もその一人だった）、二日夜、連隊旗を奉焼し、集められた兵と民間義勇軍を集め、三日午前零時を期してカロリナス台地の米軍に突入した。しかし、照明弾の下で突撃隊は集中砲火を浴び、緒方守備隊長以下ほとんど戦死をした。角田第一航空艦隊司令官も手榴弾を持って出撃したまま戻らなかった。

守備隊の組織的戦闘は三日未明で事実上終わった。また、一般邦人の死者はこの時まで三、〇〇〇人に達していたし、日本軍最後の突撃の後を追って自決する者も多かった。三日から米軍は艦艇で島の周囲から拡

声器で降伏を呼びかけ、空からビラを撒いたが、勿論多くの邦人は直ちに応ずるはずはなかったという。

「いよいよ玉砕となってしまったのですが各地に孤立した人たちはその後どうやって生き抜いたのですか。」

今だから思えるのだが、司令官や指揮官が玉砕する前に一般邦人の助命を申し入れれば非戦闘員の犠牲は防げたと考えられる。しかし、あの時はそんな状況ではなかった。

我々軍人は組織がバラバラになり、極端にいうと個人、個人の集団だった。これから一年一ヵ月間生き抜いたので、それを話したらいいか迷うのだが、三時間や四時間ではその一部しか話せないが、前に述べた玉砕記録にあるように、最後の日はいろいろの部隊の生き残りや負傷者が、それに生き残った住民が追いつめられて南海岸側のジャングルに自然に集まった。

（小川さんは自筆の略図に赤線で示す「南東ジャングル、オクリフ海岸、住吉神社、マルポの井戸、

飛行場等）

全島は艦砲射撃と空襲十余日で破壊され、緑が消えて焼けただけ見る影もなく変貌した。戦死者二万数千の腐臭は全島を蔽い、形相はこの世のものとも思われなかつた。

玉碎して半日後、夕方米巡洋艦、駆逐艦、輸送船が何十隻とまたたく間に港内、海上にひしめき、戦闘中ほとんど艦影を見せなかつた四十七センチ砲も水平線の彼方から発射していた。生き残つた者はこれを見て一足遅れて入港した連合艦隊の偉容だと錯覚を起した。それ程、我々は連合艦隊、日本軍の到着を期待して待っていた。

日没になると、米艦は戦勝を祝して万艦飾、青い灯、赤い灯、ジャズ音楽が流れ、ダンスもやっているのだらう。盛大なお祭り騒ぎだ（マリアナ諸島は玉碎、完全占領）。私どもは山腹の洞窟でこの様子を見ていた。翌朝になると私共の山腹に砲撃を射ち込み始めた。

島の周囲を巡航する艦艇から、先程言つたように、日本語で残兵降伏を勧告すると共に住民への生命保証条件を呼びかけ、「出て来い」の連発だつた。しかし、

容易にこれを素直に受け入れる者は無かつた。

日がたつにつれて一番弱い者、それは幼児、子供を連れている夫婦であつた。それ等の人が降伏。二十日も経つていろいろの捕虜收容者が舟に乗り込み、小学校の先生、町役員、僧侶、郵便局員、魚屋の主人等が、代わり代わる生徒の名を呼び、村長は区民の名を呼んで、收容所で不安は無く楽しんでゐる。「早く山から出て来い」と、親が子を呼び、子が親を呼んでゐる。毎日、繰り返し行われた。日がたつにつれて住民は投降して、本當に意志の堅い者だけが敗残兵と行動を共にした。軍籍にある者は一人も投降しなかつた。

ここに至るまで、米軍が攻めて来た時の我々設営隊のことを、もう少し話しておきたい。我々設営隊三〇〇名は、始めは各中隊の連絡がとれていたが、砲撃と米上陸軍の攻撃でジャングルの我々陣地は瞬間的にやられた。その地域は集中的にやられ、他部隊も我が隊も指揮系統をなくした。「これからどうしよう」ということになつたが、いろいろの部隊が集まり、他の人に付いていった「南海岸に行く」という集団に付い

ていった。部隊編成も何もなくなった。

指揮官（中隊長も小隊長も）がいなくなったので、陸海空住民、さらに階級に区別なく、気の合う者同志三人、五人、七人と単位グループで思い思いの場所に居を（洞穴、ジャングル）定め、その時々々の状況により居所を変更した。生活必需品はなるべく手軽に分担した。

私は玉砕直前まで、隊の書類の入った学生カバン形の書類カバンを身から離さず持ち歩いたが、今日明日に玉砕を意識した時、自分のもの、軍隊手帳、家族の写真、印鑑と共にそのカバンを大きな柳の木の元に埋めた。

私は仲間四人と行動を共にした。仲間は航空伍長（年）二十五歳、戦車隊上等兵二十四歳、軍属二十四歳、私と部隊は全部異なる。私は三十三歳で年令では上位のためこのグループのリーダーとなり、何事も平等だが最終的指示権は私にあった。

毎夜食糧徴発のため米軍倉庫、炊事場、兵器修理庫を荒す時、手分けして援護行動と直接行動の分担指示

は私がする。例えば二人は兵舎から二、三百メートル離れた所でドラム缶十数本に火を付け大火災を起し、敵の兵隊が消化にあわてている内、空になった兵舎から素早く品物を持ち出す。

前もって集合場所を定めておいて、行動中は相棒の事など考えず、有効に自分だけ安全な方向に行動する。なにしろ暗闇中のことゆえ、手当たり次第だから貴重なものが入手出来た時もあるし、三キロ入缶詰六個詰二箱持ち出して、肉缶と思ったらそれがペンキ缶であつて、労あつて効なしの泣き笑いのこともあつた。

倉庫から缶詰二五〇個も盗み出し、一晩で四キロの暗いジャングルの居所まで運び切れないため、五・六百メートル離れたキビ畑に隠し保存して、居住地から時々小出しに来ていたら、ある日、その砂糖キビ畑が敵に焼かれて、残りは全部膨張して食べられなくなったこともあつた。

玉砕半年位までは、友軍の食糧があちこちにあり、服も靴も戦死の物で間に合っていたが、そんなに永くないうちに日本の連合艦隊が必ず反撃に来ると思いつ

めていて、それまで日本軍の貯蔵品を捜して何とか生きて来ていたが、半年ぐらいで米軍物資に依存しなければ生きて行けぬ事態となつてしまつた。そのためギヤング強盗団式の捨て身行動に出るようになった。これからが、降伏せずに生き抜く戦い、玉砕から約一年一ヵ月、昭和二十年九月までの米軍と知恵くらべ、我々敗戦の中個人が生き抜く苦しみが始まりました。しかし、絶対的に自決せず命を大切にしながらです。